

観光をフックに『一度きりで
終わらない関係人口設計』を

藤谷 周平 (ふじや しゅうへい) さん プラスドライバー代表、birch株式会社取締役、一般社団法人道南地域おこし協力隊ネットワーク代表理事、一般社団法人北海道地域おこし協力隊ネットワーク理事、一般社団法人DSH社員

1995年愛知県生まれ札幌育ち。高崎経済大学地域政策学部で地域活性化・観光・まちづくりを専攻。東京で4年間人材会社の営業等を経て、2021年12月に八雲町へ。地域おこし協力隊任期中から廃校活用や観光事業に深く携わり、卒業後はbirch株式会社を設立。現在は道南・全道の協力隊ネットワーク運営など、OBとして協力隊員の支援活動にも尽力している。

北海道に移住 (U・I・Jターン) して、地域を巻き込む取り組みをする輝く人を紹介するインタビュー。お話を伺うのは、北海道各地を探訪し想いを形にする人との出会いをつなぐ、地方創生アドバイザー (総務省) のかとうけいこさん。39回目となる今回は、八雲町に1ターンし、地域限定旅行社、私設観光案内所、地域おこし協力隊支援、クリエイティブ支援などを行う藤谷周平さんにお話を聞きました。

移住のきっかけを教えてください

コロナ禍ですね。リモートワークが始まり、突然、東京の狭いワンルームが仕事場にもなり、プライベートと仕事場が一緒になり精神的に参ってしまいました。そして、次第に東京に居続ける必要はないのでは

ないかと考えるようになりました。いずれは北海道に戻りたいと考えていたので、このタイミングかなと思いました。北海道に戻るのなら、大学時代から取り組みたいと考えていた、まちづくりや地域に関わる仕事をしよう。そしてその場所は実家の札幌以外の町ならどこでもいいなという考えでした。

大学生の頃から、いつかは地方で!と決めていたとか

はい。2年生の時に群馬県桐生市にゼミでフィールドワークに入りました。地域の皆さんへのインタビュー、地域行事への参加、空き店舗を活用した期間限定の店舗運営などをさせてもらいました。まちづくりに魅力を感じ、地域の可能性を知り、いつかは“学びではなく仕事にしたい”と考えました。その頃、地

域おこし協力隊員という立場での関わり方や働き方もあることを知りました。ただ、当時は制度ができて5、6年目で、資格やスキルを持った即戦力になる人を地域の人は待っている。だから、自分はまだそのポジションには達していないので、一度社会に出て力をつけようと就職の道を選びました。

八雲町の募集要項に、ピンときたとお聞きしました

ミッションは「廃校を活用した『ペコレラ学舎』の運営。校舎をコワーキングスペースに、グラウンドをキャンプ場へと再生させる」と明確でした。そして、プロジェクトの方針は決まっているが、「立ち上げから関わってほしい」と僕には読めました。自由度と同時に任されている感があり、これだ、ここだ!と思いました。すぐに応募し合格しました。これもご縁だとすぐに引っ越してきました。

八雲町に来てみて、どうでしたか？

実際に暮らしてみると、自然が身近にありつつも、予想より田舎ではありませんでした。スーパーや病院など生活に必要な施設も整い、日常生活で不便はありませんでした。また仕事上、外から人を呼ぶことが多いので、特急が止まるマチ、高速のICもあるというのもありがたいです。都会ほどマチの規模が大きすぎないので、組織や地域の変化も割と見えるサイズ感もいいですね。

広域で活動をされていますね

着任1年半の2023年5月に「道南地域おこし協力隊ネットワーク」を立ち上げ、その代表を務めさせてもらっています。協力隊卒隊後も地域に定住するためには町内外の人脈が重要になります。そして、協力隊員同士が成功例や失敗例を共有することで、活動しやすい環境を作ることも必要です。行政区分にとらわれず、助け合うことで道南全体の発展につなげていきたいです。

その活動の一環として行っている「おむすびプロジェクト」では、道南各地の協力隊員が地元産の米や旬の食材を使っておむすびを作り、地域イベントで提

供しています。こうした活動によって、地元の皆さんに協力隊が何をしている人たちなのかがわかりやすくなりました。各地のイベントに出店することで、広域で活動するきっかけ、経験値を積むことにつながっています。「道南地域で活動したい協力隊を増やす」、そして「道南地域で活躍する地域おこし協力隊をより多くの方に知ってもらう」ために、さらに積極的に情報発信を行っていきます。

町の人に仲間にしてもらうための秘訣はありますか？

町に溶け込むための努力は惜しみません。誘いには基本的に断らずに顔を出し、町のお祭りにも参加するのは当たり前です。農家さんで人手が足りないと聞けば、すぐに駆け付けます。若さ、体力を惜しみなく提供しています。そういう姿を見てもらい、信じてもらって仲間に入れてもらっています。気が付くと八雲町を盛り上げたいと考えている地元の人とのつながりも増えてきました。

一度きりで終わらない関係人口とは？

観光でマチに来てくれた人（交流人口）を、継続的にマチに関わってもらう（関係人口）ために仕組みづくりを行っています。「ペコレラ学舎」では、旧校舎や旧教員住宅、サウナ小屋のDIYプロジェクトなどを通して、この5年間で延べで400人の人が関わってくれています。関係性ができると、リピーターになったり友だちを連れてきてくれたりと、八雲町に爪跡を残す人たちがじわじわと増えてきています。観光を入り口にして、事業を核にして地域と人をつなぐ。そして、一度きりで終わらない関係性を築いていきます。

(2026年2月取材)

インタビュー後記

協力隊卒隊後の2025年4月にオープンした「はちかん」。観光情報を発信するだけでなく、藤谷さんが地域限定旅行業務取扱管理者なので、八雲町と隣接地域の旅行を取り扱う「みなみ北海道旅行社」の営業所も兼ねています。ただこの場所は観光案内だけの場所ではなく、ここに来た旅人に町民がマチの魅力を話す語り部になって交流拠点にしたいと藤谷さんは願っています。そう遠くない未来にその夢が実現しそうな八雲町、目が離せません！

かとう けいこ (株)まちづくり観光デザインセンター代表